

「ので」を含む文例 (青空文庫)

	地の文	会話文	作品名
1	火がつくばかりに駅夫がせき立てるので、葉子は黙ったまま青年とならんで小刻みな足どりで、たった一つだけあいている改札口へと急いだ。		或る女 (前編)
2	青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札がみがみどなり立てたので、針のように鋭い神経はすぐ彼女をあまのじゃくにした。		
3	。列車の中からはある限りの顔が二人を見迎え見送るの、青年が物慣れない処女(しよじょ)のようににはかんで、しかも自分ながら自分を怒(おこ)っているのが葉子にはおもしろくながめやられた。		
4	ことに日清戦役という、その当時の日本にしては絶大な背景を背負っているの、この年少記者はある人々からは英雄(ヒーロー)の一人(ひとり)とさえして崇拝された。		
5	そして木部の全身全霊を爪(つめ)の先(さき)想(おも)いの果てまで自分のものにしなれば、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我(が)を折った。		
6	だいぶ高くなった日の光がぼつと大森田圃(おおもりたんぼ)に照り渡って、海が笑いながら光るのが、並み木の向こうに広すぎるくらい一どきに目にはいるので、軽い瞑眩(めまい)をさえ覚えるほどだった。		
7	葉子は思わずぎょつとして夢からさめたように前を見ると、釣(つり)橋(ばし)の鉄材が蜘蛛(くも)でになって上を下へと飛びはねるので、葉子は思わずデッキのバンネルに身を退(ひ)いて、両袖(りょうそで)で顔を抑(おさ)えて物を念じるようにした。		
8	葉子も今まで続けていた回想の情力に引かれて、思わずほほえみかけたのであったが、その瞬間(しゅん)燕返(つばめがえ)しに、見も知りもせぬ路傍(ろぼう)の人に与えるような、冷冽(れいれつ)な驕慢(きょうまん)な光をそのひとみから射出(しゅつご)したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯れ葉のように、二人の間をむなくひらめいて消えてし		
9	そのころちょうど東京に居残っていた早月が病気にかかって葉に親(おや)しむ身となったので、それをしおに親佐(おやさ)は子供を連れて仙台を切り上げる事になった。		
10	ランプがほの暗いので、部屋のすみずみまでは見えないが、光の照り渡る限りは、雑多に置きならべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまにまにになっていた。		
11	これはきのう古藤が油絵の具と画筆を持って来て書いてくれたので、かわききらないテレビの音がまだかすかに残っていた。		
12	白痴の子が赤ん坊同様のので、東の縁に干してある襦袢(むつき)から立つ塩臭いにおいや、畳の上に踏みじられたままこぼりついている飯粒などが、すぐ葉子の神経をいららさせた。		
13	親佐がいっこうに取り合う様子がないので、両家の間には見る見る疎々(うとうと)しいものになってしまった。		
14	そして少し人心地(ひとごち)がついたので、帯の間から懐中鏡を取り出して顔を直そうとすると、鏡がいつのまにかま二つに破(や)れていた。		
15	デッキの上の外国船客は物珍(ものめづ)しさにいち早く、葉子がよりかかっている手欄(てすり)のほうに押し寄せて来たので、葉子は古藤を促して、急いで手欄の折れ曲(まが)りかどに身を引いた。		
16	帯の下になった葉子の胸から背にかけたあたりは汗がじんわりにじみ出たらしく、むしむしするような不愉快を感じるの、狭苦しい寝台(ばース)を取りついたり、洗面台を掘えたりしてあるその間に、窮屈に積み重ねられた小荷物を見回しながら、帯を解き始めた。化		
17	東京湾を抜けると、黒潮に乗って、金華山(きんかざん)沖あたりからは航路を東北に向けて、まっしぐらに緯度を上(のぼ)って行くので、気温は二日(ふつか)目あたりから目立って涼しくなっていた。		
18	船に乗ってからろくろく運動もせずに、野菜気(やさいけ)の少ない物ばかりをむさぼり食べたので、身内の血には激しい熱がこもって、毛のさきへまでも通うようだった。		
19		「とんと食堂においてがなかったの、お案じ申しましたの、船にはお困りですか」	
20	二人(ふたり)の間の挨拶(あいさつ)はそれなりで途切れてしまったので、田川博士(はかせ)はおもむろに事務長に向かってし続けていた話の糸目をつなごうとした。		
21		モンローの宣言は立派に文字になって残っているけれども、法律というわけではなし、文章も融通(ゆうずう)がきくようにできているので、取りようによっては、どうにでも伸縮する事ができるのです。	
22	ことにいちばん年若く見える一人(ひとり)の上品な青年——船長の隣座にいたので葉子は家柄(いえがら)の高い生まれに違いないと思った——などは、葉子と一目標を見合わせたのが最後、震えんばかりに興奮して、顔を得(え)上げないでいた。		
23	洋服姿の田川夫妻がはっきりと見分けがつくほどの距離に進みよっていたので、さすがに葉子もそれを見て見ぬふりでもやり過ぎず事は得(え)しなかった。		
24	葉子はなんとなく物足らなくなって、また何かいい出すだろうと心待ちにしていたが、その先を続ける様子がないので、心残りを覚えながら、また自分の心に帰って		
25	しかしその時田川博士が、サルンからもれて来る灯(ひ)の光で時計を見て、八時十分前だから部屋(へや)に帰ろうとい出出したので、葉子はべつに何もいわずにしまった		
26	葉子は嘔(は)き気(け)はもう感じてはいなかったが、胸もどが妙に締めつけられるように苦しいので、急いでポアをかきやって床(ゆか)の上に捨てたまま、投げるように長椅子(ながいす)に倒れかかっていた。		
27	そこだけは星が光っていないので、雲のある所がようやく知れるぐらい思いついて暗い夜だった。		
28	。それにたたずんでいるのに足が爪先(つまさき)からだんだんに冷えて行って、やがて膝(ひざ)から下は知覚を失い始めたので、気分は妙に上(うわ)ずって来て、葉子の幼い時からの癖である夢ともうつつとも知れない音楽的な錯覚に陥って行った。五体も心も不思議な熱を覚えながら、一種のリズムの中に揺り動かされるように		

	地の文	会話文	作品名
29	おまけに青年の肩に置いた葉子の手は、華車(きゃしゃ)とはいいいながら、男性的な強い弾力を持つ筋肉の震えをまざまざと感ずるの、これらの二人(ふたりの)男が与える奇怪な刺激はほしいままにからまりあって、恐ろしい心を葉子に起こさせた。木村……何をうるさい、よけいな事はいわずと黙って見ているがいい。		
30	岡は不意に人が現われたので非常に驚いたふうで、顔をそむけてその場を立ち去ろうとするのを、葉子は否応(いやおう)なしに手を握って引き留めた。		
31	若い女性にはそのほにかみやな所から今まで絶えて接していなかったの、葉子にはすがり付くように親しんで来た。		
32	船客たちは船の動揺に辟易(へきえき)して自分の船室に閉じこもるのが多かったの、サルンががら明きになっているのを幸い、葉子は岡を誘い出して、部屋のかどになった所に折れ曲がって据(す)えてあるモロッコ皮のデヴァンに膝(ひざ)と膝を触れ合わせさんばかり寄り添って腰をかけて、トランプをいじって遊んだ。		
33	米国に近づくにつれて緯度はだんだん下がって行ったので、寒気も薄らいでいたけれども、なんといつても秋立った空気は朝ごとに冷(ひ)え冷(び)えと引きしまっていました。		
34	水夫長と一人(ひとりの)ボーイとが押し並んで、靴(くつ)と草履(ぞうり)との音をたてながらやって来た。そして葉子のそばまで来ると、葉子が振り返ったので二人(ふたり)ながら慇懃(いんぎん)に、「お早うございます」と挨拶(あいさつ)した。		
35	こんな思いやりがとめどもなく葉子の心を襲い立てるので、葉子はその老人に引きずられてでも行くようにとどンドン水夫部屋の中に降りて行った。		
36	しかしそれにも係わらず事務長は言いわけ一ついわず、いっこう平気なもので、きれいな飾り紙のついた金口(きんぐち)煙草の小箱を手を延ばして棚(たな)から取り上げながら、		
37	ふと倉地の手がゆるんだので葉子は切って落とされたようにふらふらとよるけながら、危うく踏みとどまって目を開くと、倉地が部屋(へや)の戸に鍵(かぎ)をかけたようにしているところだった。		
38	鍵が合わないの、 「糞(くそ)っ」 と後ろ向きになってつぶやく倉地の声が最後の宣告のように絶望的に低く部屋の中に響いた。		
39	しばらくしてその叫喚(けいけん)がややはずまったので、葉子はようやく、横浜を出て以来絶えて用いられた汽笛(きふえき)の音である事を悟った。検疫所が近づいたのだなと思って、襟(えり)もとをかき合わせながら、静かにソファの上に膝(ひざ)を立てて、眼窓(めまど)から外面(とのも)のをぞいて見た。		
40	葉子は胸(おさ)えあまる恨みつらみをいい出すには、心があまりに震えて喉(のど)がかわききっているの、下(くだ)ちびるをかみしめたまま黙っていた。		
41	葉子はそのくせ、船客と顔を見合わせるのが不快でならなかったの、事務長に頼んで船橋(ふねばし)に上げてもらった。		
42	そしてシヤトルの市街(いちがい)から起る煤煙(ばいえん)が遠くにぼんやり望まれるようになったので、葉子は自分の部屋に帰った。そして洋風の白い寝衣(ねまき)に着かえて、髪を長い編み下げにして寝床にはいった。		
43	ただなんでもいいせせと手当たり次第(しだい)たくをしておかなければ、それだけの心尽(こころづ)きを見せて置かなければ、目論見(もくろみ)どおり首尾(くびび)が運ばないように思ったので、一べん横(よこ)になったものをまたむくむくと起き上がった。		
44	その沈黙(しんもく)はしかし感傷(かんそう)的という程度(ていど)であるにはあまりに長く続き過ぎたので、外界の刺激(しき)に応じて過敏(かびん)なまでに満干(みちひ)のできる葉子の感情(かんじ)は今まで浸(ひた)っていた痛烈(いたれつ)な動乱(どうらん)から一皮(ひとかわ)一皮(ひとかわ)平調(へいちょう)に還(かえ)って、果てはその底(そこ)に、こら嵩(こう)じてはいとわしいと自分でずらがるような冷(れい)ややかな皮肉(ひにく)が、そろそろ頭(かぶ)を持ち上げるのを感じた。		
45	葉子はべつに読(よ)みたくなかったが、多少(たう)の好奇心(こうしん)も手伝(て)うのとにかく目を通(とお)して見た。		
46	木村の意気込み(い気こみ)はしかしそんな事ではごまかされそうにはなかったの、葉子はめんどくさくなって少し険(けん)しい顔(かほ)になった。		
47	そして自分が米国(べいこ)に来てからなめ尽くした奮闘(ふんとう)生活(せいかつ)もつまりは葉子(えこ)というものがあればこそできたの、もし葉子がそれに同情(どうじょう)と鼓舞(こぶむ)とを与えてくれなかったら、その瞬間(しゅんかん)に精(せい)も根(ね)も枯(く)れ果(は)れてしま(ま)うに違(ちが)いないという事を繰り返(くりか)し繰り返(くりか)し熱心(ねつしん)に説(せつ)いた。		
48	もつとも木村(きむら)が毎日(まいにち)米国(べいこ)という香(かほ)におい(おい)を鼻(び)をつくばかり身の回(まわ)りに漂(ひら)わせて、葉子(えこ)を訪(たず)ねて来るの、葉子(えこ)はうっかり寝床(ねど)を離(はな)れる事もできなかった。		
49	葉子(えこ)はしかし、いつでも手(て)ぎわよくその場合(ばい)場合(ばい)をあやつって、それから甘い歎(なげ)息(いき)を引き出すだけの機(は)才(さい)(ウイット)を持ち合わせていたの、この一(ひと)か月(げつ)ほど見(み)知らぬ人(ひと)の間に立(た)ちまじって、貧(ひん)乏(ぱく)の屈辱(くつじやく)を存(ぞん)分になめ尽くした木村(きむら)は、見る見る温(ぬく)柔(な)な葉子(えこ)の言葉(ことば)や表情(へいじょう)に酔(よ)いしれるのだった。		
50	興(き)録(ろく)はいいかげんな事をいって一日(いちにち)延(の)びに延(の)びしているの、たまたまなくて木村(きむら)が事務長(じむちょう)に相談(さうだん)すると、事務長(じむちょう)は興(き)録(ろく)よりもさらに要領(ようりやう)を得(え)ない受け答(こた)えをした、しかたなしに木村(きむら)は途方(とほう)に暮(く)れて、また葉子(えこ)に帰(かえ)って来て泣(な)きつくように上陸(じやうりく)を迫(せま)るのだった。		
51	この船(ふね)の航海(かいかい)中(ちゆう)シヤトルに近(ちか)くなったある日(ひ)、当時(たうじ)の大統領(だいとつりやう)マッキンレーは凶徒(きゆうと)の短銃(たんじゆう)に斃(たお)れたので、この事件(じけん)は米国(べいこ)でのうわさの中心(ちゆうしん)になっているのだった。		
52	その内容(ないよう)がどんなものであるかの想像(さうぞう)もつかないの、それを木村(きむら)に読(よ)ませるのは、武器(ぶき)を相手(あいて)に渡(わた)して置いて、自分(じぶん)は素手(すで)で格闘(かくとう)するようなのだった。		
53	自分(じぶん)には故国(ここく)が慕(こ)われるばかりでなく、葉子(えこ)のように親(お)しみを覚え(おぼ)えさせてくれた人(ひと)はないの、葉子(えこ)なしには一刻(いこく)も外国(がいこく)の土(つち)に足(あし)を止(と)めている事はできぬ。		
54	岡(おか)はオリエンタル・ホテルの立派(りつぱ)な一室(いっしつ)にたった一人(ひとり)でいたが、そのホテルには田川(たがわ)夫妻(ふうさい)も同宿(どうしゆく)なので、日本人(にほんじん)の出入(しゆり)りがうるさいといつて困(こま)っていた。		
55	木村(きむら)の訪問(ぼんぽん)したというのを聞いて、ひどくなつかしそうな様子(ようす)で出迎(でむか)えて、兄(あに)でも敬(うや)まうようにもなして、やや落(お)ち付(つ)いてから隠(かく)し立て(たて)なく真率(まんと)に葉子(えこ)に対する自分の憧憬(しやうけい)のほどを打ち明(あ)けたので、木村(きむら)は自分のいおうとする告白(こつぱん)を、他人(たにん)の口(くち)からまざまざと聞(き)くような切(せつ)つな情(じやう)にほだされて、もらい泣(な)きまです。		

	地の文	会話文	作品名
56	そして水夫のような仕事にはとても役に立たないから、幸いオークランドに小農地を持ってとにかく暮らしを立てている甥(おい)を尋ねて厄介(やっかい)になる事になったので、札かたがた暇乞(いとまご)いに来たというのだった。		
57	葉子は往復一か月の余を船に乗り続けていたので、船脚(ふなあし)の揺(ゆ)らめきのなごりが残っていて、からだがふらりふらりと揺れるような感じを失ってはいなかったが、広い畳の間(ま)に大きな軟(やわ)らかい夜具をのべて、五体を思うまま延ばして、一晚(ひとよ)ゆっくと眠り通したその心地(ごこち)よさは格別(かくべつ)だった。		或る女 (後編)
58	ちょっとでもじっとしていられない葉子は、日本で着ようとは思わなかったので、西洋向きに注文した華手(はで)すぎるような綿入れに手を通しながら、とっ追いつ考えた		
59	テレピン油のような香(にお)いがぶんぶんするのでもそれがきょうの新聞である事がすぐ察せられた。		
60	三面に来ると四号活字で書かれた木部孤(きべこきょう)という字が目に着いたので思わずそこを読んで見る葉子はあっと驚かされてしまった。		
61	葉子は絵島丸まで行って見る勇気もなく、そこを幾度もあちこちして監視補たちの目にかかるともうさかたつたので、すくすく税関の表門を県庁のほうに引き返した		
62	どうしても旅館に帰るのがいやだったので、非常な物足らなさを感じながら、葉子はそのままそこから倉地に別れる事にした。		
63	その旅館というのは、倉地が色ざたでなくひいきにしていた芸者がある財産家に落籍(ひか)されて開いた店だというので、倉地からあらかじめかけ合っていたのだった。		
64	葉子は思い設けた以上の好意をすぐその人に対して持つ事ができたので、ことさら快い親しみをもち前の愛嬌(あいきょう)に添えながら、挨拶(あいさつ)をしようとする、その人は事もなげにそれをささげって、「いずれ御挨拶は後ほど、さぞお寒うございましてしょう。		
65	「さあ」と葉子もはっきりしない返事をしたが、小寒(こさむ)くなって来たので浴衣(ゆかた)を着かえようとする、そこに袖(そで)だたみにしてある自分の着物につくづく愛想(あいそ)が尽きてしまった。		
66	葉子はいたずら者らしくひとり笑いをしながら立(た)て膝(ひざ)をしてみたが、それには自分ながら気がひけたので、右足を左の腿(もも)の上に積み乗せるようにしてその足先をとんびにしてすわってみた。		
67	葉子は倉地と女将とをならべて一目見たばかりで、二人(ふたり)の間の潔白(けつぱく)のを見て取っていたし、自分が寝てあとの相談というても、今度の事件を上手(じょうず)にまとめようというについての相談だという事のみ定めていたの、素直(すなお)に立って座をはずした。		
68	何かの話のついでに入用な事が起こったのだろう、倉地はしきりに身のまわりを探って、何かを取り出そうとしている様子だったが、「あいつの手携(てさ)げに入れたかしらん」という声(こゑ)がしたので葉子ははっと思った。		
69	その次の朝女将と話をしたり、呉服屋を呼んだりしたので、日(ひ)がかなり高くなるまで宿にいた葉子は、いやいやながら例(れい)のけばけばしい綿入れを着て、羽織(はおり)だけは女将が借りてくれた、妹分(いもうと)という人の烏羽黒(うばぐろ)の縮緬(ちりめん)の紋付きにして旅館を出た。		
70	一か月の間(あいだ)来ないだけなのだけれども、葉子にはそれが一年にも二年にも思われたので、その界限(かいわい)が少しも変化(へんげん)しないで元(もと)のとおりなのがかえって不思議(ふしぎ)なようだった。		
71	今度の船には飛んでもない一人の奥さんが乗り合わせていてね、その人がちょっとした気まぐれからある事ない事取りまぜてこっちにいってよこしたので、事(こと)あれかしと待ち構えていた人たちの耳にはいったんだから、これから先(まづ)だってどんなひどい事をいわれるかしれたもんじゃないんだよ。		
72	その夜は妹たちが学校から来るはずになっていたのでも葉子は婆(ばあ)やの勤める晩飯も断(ことわ)って夕方(ゆふぐれ)その家を出た。		
73	新聞記者などがどこをどうして探(たず)ね出したか、始めのうちは押し強く葉子に面会(めんかい)を求めて来たのを、女将(おかみ)が手ぎわよく追(お)い払(は)ったので、近づきこそはしなかったが遠巻きにして葉子の挙動(きょどう)に注意(ちゅうい)している事などを、女将は眉(まゆ)をひそめながら話して聞かせたりした。		
74	これは葉子にも意外(いがい)だったので、葉子は鋭(えい)く倉地(くらぢ)に目(め)くぼせしたが、倉地は無頓着(むとんじゃく)だった。		
75	双鶴館(そうかくかん)の女将(おかみ)はその女と懇意(こんい)の間(ま)だったが、女に子供が幾人かできて少し手ぎま過ぎるので他所(よそ)に移転(い)しようかといっていたのを聞き知っていたので、女将のほうで適当(ていとう)な家をさがし出してその女を移(うつ)らせ、そのあとを葉子が借りる事に取り計(さ)らしてくれたのだった。		
76	倉地が先(まづ)に行(い)って中の様子(ようす)を見て来て、杉林(すぎばやし)のために少し日(ひ)当(あ)たりはよくないが、当分(たぶん)の隠れ家(が)としては屈強(くつじょう)だといったので、すぐさまそこに移(うつ)る事に決(き)めたのだった。		
77	ふと車(くるま)が停(と)まって梶棒(かじぼう)がおろされたので葉子ははっと夢心地(ごこち)からわれに返(かえ)った。		
78	車夫(くるまぶ)は葉子(はな)を助けようにも梶棒(かじぼう)を離(はな)れれば車をけし飛ば(とば)されるので、提灯(ちようちん)の尻(しり)を風上(かざかみ)のほうに斜(しゃ)に向けて目(め)八分(ぶ)に上げながら何か大声(こゑ)に後ろ(うしろ)から声(こゑ)をかけていた。		
79	木村(きむら)からも古藤(ことう)の所(ところ)か五十川(いそがわ)女史(にょし)の所(ところ)かあててたよりが来(き)ているには相違(さむか)ないと思(おも)ったけれども、五十川(いそがわ)女史(にょし)はもとより古藤(ことう)の所(ところ)にさえ住所(じゅうしょ)が知らされていないので、それを回送(かいそう)してよこす事もできないのを葉子は知(し)っていた。		
80	郵便(ゆうびん)だけは移転(い)通知(つうし)をして置(お)いたので倉地(くらぢ)の手(て)もとに届(と)いたけれども、倉地(くらぢ)はその表書(ひょうしょ)さえ目(め)を通(と)そうとはしなかった。		

	地の文	会話文	作品名
81	それを見ると倉地は、一時はもみ消しをしようと思ってわたりをつけたりしたのでこんなものが来ているのだがもう用はなくなったので見るには及ばないといって、今度は倉地が封のままに引き裂いてしまった。		
82	夜となく昼となく思い悩みぬいた事がすでに解決されたので、葉子は喜んで喜んで喜び足りないように思った。		
83	同時にそんな事を見たのでその日が日曜日である事にも気がついたくらい二人の生活は世間からかけ離れていた。		
84	貞世がはしぎきって、胸いっぱいものを前後も連絡もなくしゃべり立てるので愛子さえも思わずにやりと笑ったり、自分の事を容赦なくいわれたりすると恥ずかしそうに顔を赤らめたりした。		
85	いまだにあなたの居所を知る事ができないので、僕の手紙はやはり倉地氏にあてて回送していると書いてあります。		
86	倉地は事業のために奔走しているのでその夜は年越しに来(こ)ないと下宿から知らせて来た。		
87	葉子は何を原因ともなくそのころ気分がいらいらしがちで寝付きも悪かったので、ぞくぞくしみ込んで来るような寒さにも係わらず、火鉢(ひばち)のそばにいた。		
88	倉地がいっこうに無頓着(むとんじゃく)なので、葉子はまだ籍を移してはいなかった。		
89	どこにか春をほめかすような日が来たりしたあとなので、ことさら世の中が暗澹(あんたん)と見えた。		
90	時間でもないので葉子は思わずぎよつとして倉地から飛び離れた。		
91	葉子はなおも動(どう)じなかった。そこに婢(おんな)がはいって来たので話の腰が折られた。二人(ふたり)はしばらく黙っていた。		
92	ことにその夜は木村の事について倉地に合点させておくのが必要だと思ったのでいい出された時から一緒に下心(したごころ)ではあったのだ。		
93	倉地の浴したあとで、熱めな塩湯にゆっくり浸ったのでようやく人心地(ひとごち)がついて戻(もど)って来た時には、素早(すばや)い女中の働きで酒肴(しゅこう)がととのえられていた。		
94	戸板の杉(すぎ)の赤みが鯉節(かつおぶし)の心(しん)のように半透明にまっ赤(か)に光っているので、目が高いのも天気美しく晴れているのも察せられた。		
95	鬢(びん)だけを少しふくらましたので顎(あご)の張ったのも目立たず、顔の細くなったのもいくらか調節されて、そこには葉子自身が期待もしなかったような磨練(はりれん)的(てき)の(は)いたいてき)と同時に神経質(しんけいしつ)なすごくも美しい一つの顔面が創造されていた。		
96		古藤さんにはそこまではお話ししませんでしたけれども、わたし自分の家の事情がたいへん苦しいので心を打ちあけるような人を持っていませんでしたが	
97		古藤がどンドン言葉を続けるのでそのまま顔を赤くして黙ってしまった)あなたと木村とがどうしても折り合わない事だけは少なくとも認めているんです。	
98	しかし倉地がどンドンそっちに向いて歩き出すので、少しすねたようにその手に取りすがりながらもつれ合って人気(ひとけ)のないその橋の上まで来てしまった。		
99	倉地がいちはやく岸に飛び上がって、手を延ばして葉子を助けようとした時、木部が葉子に手を貸していたので、葉子はすぐにそれをつかんだ。		
100	一町(ちょう)ほど来てから急に行く手が明るくなったので、見ると光明寺裏の山の端(は)に、夕月が濃い雲の切れ目から姿を見せたのだった。		
101	廊下の明りは大半消されているので、ガラス窓からおぼろにさし込む月の光がたよりになった。		
102	糊(のり)が硬(こわ)いと、気おくれがしているのでちょっとははいりそうになかった。		
103	その矢先なので、葉子は胸にことさら痛みを覚えた。		
104	正井の言葉から判じても、それは女手などでは実際どうする事もできないものらしいので葉子はこれだけは断念して口をつぐむよりしかたがなかった。		
105	夜の事ではあり、そのへんは街灯の光も暗いので、葉子にはさだかにそれとわからなかったが、どうも双鶴館(そうかくかん)の女将(おかみ)らしくもあった。		
106	一台よりいなかったの飛び乗ってあとを追うべき車もなかった。		
107	ほんとうに双鶴館の女将(おかみ)が来たのではないらしくもあり、番頭までが倉地とぐるんになっていてしらじらしい虚言(うそ)をついたようにもあった。		
108	岡の来た時だけは、葉子のきげんは沈むような事はあっても狂暴になる事は絶えてなかったの、岡は妹たちの言葉にさして重きを置いていないように見えた。		
109	なんでも来年に開かれるはずだった博覧会(はくらんかい)が来々(さら)年(さいらいねん)に延びたので、木村はまたこの前以上の窮境(きうけい)に陥(おと)つたらしいのです。		
110	それをつべこべろくろくあなたの世話も見ずにおきながら、いい立てなされるので、筋が違(ちが)うといふように開かせて上げたところだ。		
111	葉子は愛子一人(ひとり)が留守する山内(さんない)の家のほうに、少し不安心ではあるけれどもいつか暇(ひま)をやったつやを呼び寄せておこうと思って、宿もとにいったら、つやはあれから看護婦(かんごふ)を志願(しごん)して京橋(きょうばし)のほうのある病院にいますという事が知れたので、やむを得ず倉地の下宿から年を取った女中を一人頼んでいってもらう事にした。		
112	おりから貞世はすやすやと昏睡(こんすい)に陥っていたので、葉子はそと自分の袖(そで)を捕(とら)えている貞世の手をほどいて、倉地のあとから病室を出た。		

	地の文	会話文	作品名
113	寒いとも暑いともさらに感じなく過ごして来た葉子は、雨が襟脚(えりあし)に落ちたので初めて寒いと思った。		
114	葉子は凶器に変わったようなその手を人に見られるのが恐ろしかったので、茶わんと匙(さじ)とを食卓にかえて、前だれの下に隠してしまった。		
115	金も送っては来なかった。あまりに変なので岡に頼んで下宿のほうを調べてもらおうと三日前に荷物の大部分を持って旅行に出るといって姿を隠してしまったのだそう		
116	疲労が回復するまでしばらくの間(あいだ)手術は見合わせるというので葉子は毎日一度ずつ内診をしてもらうだけでする事もなく日を過ごした。		
117	いつものとおりはきはきとした手答えがないので、もうぎりぎりして来た葉子は剣(けん)を持った声で、「愛さん」と語気強く呼びかけた。		
118	またそんな意味ではなく、あまり不思議な詰問が二度まで続いたので、二度目には怪訝(げげん)に思っって顔を上げたのかとも考えられる。		
119	あまり葉子の言葉が激して来るので、愛子は少しおそれを感じたらしくあわててこういって言葉でささえようとした。		
120	電気もまだ来ていないのでつやにその手紙を読ませてみた。		
121	頭が激しい動悸(どうき)のたびごとに震えるので、髪の毛は小刻みに生き物のようにおののいた。		
122	電灯が故障のために来(こ)ないので、室内には二本の蠟燭(ろうそく)が風にあおられながら、薄暗くもっていた。		